

奉天の終戦

兵庫県 多田 すみゑ

南満州国奉天駅で、八月十五日午後一時頃に、駅長さんに聞きました。それで下車し、奉天在住の親切な日本人の方のご厚意で、五日間、百人ほどの東安組がお世話になり、食事は交替で給食センターのような所へ毎日取りに行きましたが、駅前で満人の暴動が起り危険なため中止いたしました。各自持参の食料を出しあって食事をいたしました。その方のお家も設備も一般の家庭でしたので、下水がつまったりしてとても大へんでした。桜井小学校へ変わり自炊いたしました。木をひらい、こじきのような生活でした。でも、その煙を目当てにピストルが打ちこまれて、大へんおどろきました。奉天郵便局で、一軒に金五百円出せましたので、父と二人で行き、金千円出してきました。それが満州での最後のお金でした。八月中で奉天の食料が不足いたしましたし

たので、外の土地へ変わって下さいとのことで主人の妹が宮の原の満鉄に勤めている方と結婚しておりましたので、私等主人の父母、私の長男と四人、九月一日にたずねていきました。二十日ぶりに、ゆっくりと眠ることができましたが、それもつかの間、八路軍より婦人の仕事があるのでぜひ来るようにと、満鉄の奥様方に募集がありましたので、私、皆様を代表いたしました。もう一人の娘さんと二人、申し出ました。被服工場でした。その時給料としてコウリヤンと小豆でした。始めて食料の配給、とてもうれしいと思いました。

八月二十日ソ連兵が入って来ましてからは、毎日がビクビクでした。

私も母も時計をねらわれました。娘さんたちは皆坊主になり、男の作業服を着ました。被服廠は歩いて三十分かかりました。でも、途中危険だからと、八路軍の将校と兵隊さんが、銃を持って朝晩送り迎えして下さったので、道中は心丈夫でしたが舍宅の近くまで来ましてからがこわかったです。毎日毎日がびくびくでした。

十一月より近所に分工場ができましたので、またずっと続いて働き、代表として組長になりました。そして二十一年一月一ぱい働きましたが、二月八日国府軍が進駐して来まして、国府軍直轄の石鹼会社へ入社し二か月働きました。その時の給料はお金でした。

その国府軍も逃げ出しまして、その時に従軍看護婦にぜひなれ、そして軍とともに行動してくれとのきつい達しでした。石鹼会社も軍の仕事だからと、会社の証明書を出して行きましたが、どうしても聞き入れてもらえず、途方にくれていました。ちょうどその時、兵隊がバタバタと片づけて逃げ出しましたので、そのすきに私等十人ほど逃げて帰宅いたしました。家でも皆が大へん喜んでくれました。

翌日から粟と小豆を満人の心安い人に持って来てもらい、粉にひき、おもちを作って、母と二人、行商に行きました。ずっと遠い山の舎宅、一軒一軒ノックして行商いたしました。何もないときでしたので、作っただけは売りつくし、毎日毎日何の望みもない毎日でしたが、でも、生活のためにはいたしかたのない日々で、いくらか

希望が生まれて来ました。満人の中でも私等日本人に、品物を持って来て下さる人があるということは、ほんとうにうれしいことでした。

五月五日宮の原上空にて、八路と国府の戦争がありお節句でしたので注文のおもちを、玉の下をくぐりぬけておとどけいたしました。あちこちに支那の兵隊さんが死んでいました。

六月に入ってから、被服省時代や石鹼会社と、いつも行動を共にしました友達の鈴木さんが、第一の引揚げて帰国されました。京都の方でした。私の里、富山へは行きを出して下さり、私の消息がわかったと里の人達が申しておりました。

私たちは第一次で帰国したのですが、父が病気になる、帰るのが延びたのです。それからは私たちも二十一年中には帰国できるだろうと思いましたが、帰国したくに取りかかり、妹と二人で妹等の持物の衣類を売りに行きました。ワットよって来て取られそうになりましたので、男物の兵児帯を袖に通し、取られないようにして売りました。

そして帰国のお金を作りました。私等四人もお金のお蔭で帰国させていただきました。家の中に誰も入れないよう、舎宅四軒一組でしたので、入り口に枕木でバリケードを築き、今晚あぶないとニュースが入れば、女子供は一軒の家に皆が集まり、男の方々が寝ずの番をして下さいましたが、おかげさまで一回もそんな危険な目にはあいませんでした。一回だけ支那の兵隊が入って来まして、妹の着物を二枚とられました。またソ連の兵隊さんが三人入ってきましたが、たばこを父が二本しか持っていますませんでした。三人でわけて吸ってから「ズドラウス」と言って帰りました。よくソ連兵が入って来まして、女性は大へんな目にあうとの話がありました。きつと将校さんだったのでしようか、それだけでした。ほんとうにおとなしい兵隊さんでした。

私たちは八月二十二日宮ノ原を出ました。

朝、リュックサックを背負うと同時に満人が入って来ました。片っぱしから物をとって行きました。内地へ持つて行く物だけで、何もないほど売りつくしておりますのに、それでもまだ何かないかと探し持つて行きました。

駅前で持物検査があり、貴金属は持っていないか、いろいろと調べられました。それから列車に乗りました。無蓋車でした。途中雨が降り頭からずぶぬれ、着替の肌着も皆ぬれてしまい、大へんでした。トンネルくぐると皆真黒の顔、ぬれタオルで鼻をふさぎました。

二十四日錦州へ着きました。九月九日まで錦州でとめられました。来る日も来る日も音沙汰なしでした。元、馬小屋でした。コンクリートの上にうすい毛布、各自持つて来たのです。朝晩すごく寒かったです。私一年前に東安市を出したので、着るものもなく、お金もなく、食べるものは何でも錦州では売っていましたが、私等は何も持っていないので苦労いたしました。

九月十日に始めて馬小屋を出まして、貨車に乗りこみました。そして汽関車をつけてくれましたが、二時間経っても発車しませず、その内汽関車もどこかへ持つて行ってしまったので、皆が大へんおこりまして、貨車から降りても、馬小屋に入らず、外に枯草をしいて眠りました。その内雨が降り出し、皆が貨車の下にもぐりこみ休みました。朝早く貨車が動き出すとのことで、あわてて飛

び出しました。その貨車に乗せてもらい、十一日コロ島に着きました。港はでき上がっておりませず、船と港の間が大分はなれていましたので、大へんこわかったです。荷物は一度に持てるだけでした。

父母と長男と私と四人分を一人でリュック二つに入れて、なわばしごのようにせまい橋をのぼって、下は海、ほんとうに目もくらむほどでした。アメリカの航空母艦でした。三日三晩船は走り通し、途中とても景色もよく波もおだやかでした。船に乗って岸をはなれましたとき、始めてこれで日本に帰れるのだと、思わず泣きました。船長さんのご好意で君が代も歌いました。日の丸も一年ぶりにお目に掛かりました。皆泣きました。パンザイバンザイト、船長さんも皆さんもとても親切でした。お帰りなさい、お帰りとアイサツをして下さったのです。その内船内でのど自慢が始まりました。リングゴの歌です。船員さんと引揚げの娘さん等が肩をくんで歌いました。随分いろんな歌がとび出しました。

十四日博多に着きました。船の中で一夜止められました。病人が一人でも出た場合、上陸させてもらえないと

のことでしたので、随分と気をつけました。私等の船は何ごともなく上陸できました。博多港へ上陸したのですが、何と言っているかわかりません。とてもうれしくて、言葉に表わすことができませんでした。

収容所まで一時間ほど歩かされました。きたない顔きたないもんべ、こじきの行列のようでした。

博多はとでもしずかな町でした。米兵と仲よく肩を組んで歩く日本女性、私等だけがえらい目にあつたのではないかと思いました。一晚とめてもらい、翌日汽車に乗って、故郷の富山へと向かいました。九月十六日朝、出町駅へ着きましたが、あまりの姿で恥かしく、父の身体も弱ってしまいましたので、タクシーを探しましたが、いたんでいるとのことで、一時間ほど待ちまして家へ帰りました。余り急に帰りましたので、夢ではないかと驚いておりました。早速とお味噌汁をぬくめて下され、一年ぶりにおいしい朝食をいただきました。父は病気でしたので、帰国しましてからは、ずっと寝たきりでしたが、年末の十二月十五日、七十七歳で死亡いたしました。途中の無理がさわったらしいです。日本へ帰るのはいやだいやだ

と、終戦後ずっと申しておりました。

私の主人も、二十年七月二十五日現地召集でした。戦死いたしました。公報は三十四年です。引揚げの時の長男も今年三十一歳です。

身体が弱いので、なかなか本人もガンバリたいのですが、思うにまかせません。でもだんだん元気になりますので、その内いいこともあると思っております。

ひとつの思い出

静岡県 平井正元

昭和十三年渡満、昭和二十年敗戦、昭和二十二年引揚げまで丁度十年間、妊娠七か月の大きい腹の妻とともに、リュックサックを背負い日本に上陸し帰郷したのが昭和二十二年二月の寒いときでした。

大連港の岸壁の倉庫に市内の知り合いと、ソ連の突然な侵略に奥地から丸裸で逃げてきた数万の人達と一緒に収容され、故国から配給された貨物船に、ソ連兵の厳し

い調査をやっと解放され乗船し、出港からは玄界灘を暴風雨と大波に揺らされて、暗い日本海を経て雪の舞鶴港に上陸できました。

敗戦時では北鮮に近い東辺道の盆地の通化で、関東軍の輜重部隊へ現地召集として入隊しておりました。当時、満州国の皇帝が新京を遷り通化にいたので関東軍の主腦も通化で最後まで戦うのだと言っておりました。

私達中隊も、そのつもりで兵器や車馬の輸送を懸命に努力しておりました。私は地域の状況が分かるのでトラックの班で周辺で食糧集荷を毎日行なっていましたが出ることには街であう満人動向や私達、兵隊を見る目がだんだん違ってきました。暗くなると周囲の山々で煙火が上げられ、それに応ずるように朝鮮人の若い兵隊が一人二人と隊を脱出し、それを追う銃声が毎晩のことであり、戦争の終りが切迫したと思えました。

八月十五日、部隊は集合され天皇からの『終戦の詔勅』を放送で聞きました。そのときなんだか涙が出てきました。

はじめて戦争に敗けたので、これからどうなるのか、